

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 羽根 次郎

論文題目 ルジャンドルと台湾

——1874年日本軍台湾出兵事件への道程——

論文審査委員 松永 正義、三谷 孝、洪 郁如

本論文は1874年の日本による台湾出兵に深く関わった御雇い外国人ルジャンドルの台湾認識を軸としつつ、そのもととなった西欧の台湾認識を検討し、またあわせて出兵の行われた地域の歴史と社会の複雑なありかたを指摘するものである。本論文の目的は以上の作業を通じて台湾出兵を原住民族の立場から考えるための前提的視座を構築しようとする所にある。

1 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

序章 問題の整理

はじめに

第1節 恒春半島の交通

第2節 研究史総括と問題の所在

第1部 瑯嶠を視る眼差し

第1章 「China」「タタール」「台湾」の定位について

はじめに

第1節 長城の意義をどう解釈するのか

第2節 「天下」のイメージと植民地主義

第3節 清朝の「天下国家」化について

第4節 18世紀欧州における「タタール」の問題

おわりに

第2章 啓蒙思想期以降の欧文における恒春半島記述

はじめに

第1節 ドマイヤの南台湾記述と康熙期漢籍史料との対応について

第2節 航海記について

第3節 『中国概説』とクラブロートの「瑯嶠」紹介

第4節 「南部」と「南東端」

おわりに

第3章 瑯嶠への移民と「生番」「熟番」「混血」

はじめに

第1節 清朝領台初期における広東籍客家移民と辺境開拓

第2節 恒春半島南部への移民の展開

第3節 瑯嶠における移民集落の性格について

第4節 恒春縦谷平原における「平埔」と「生番」と「混血」の諸相

おわりに

第4章 台湾出兵事件以前における「Boutan（牡丹）」の含意について

はじめに

第1節 「Boutan」について

第2節 「瑯嶠下十八社」の史的経緯

第3節 「Boutan」の意味

おわりに 琉球漂流民殺害について

第2部 「Boutan」と「牡丹社」

第5章 ローバー号事件の解決過程について

はじめに

第1節 事件の発生

第2節 ルジャンドルの台湾渡航

第3節 アメリカ軍遠征の失敗と清朝官軍の遠征

第4節 瑯嶠におけるピッカリングの行動について

第5節 協定の締結と問題の解決

おわりに

第6章 「ルジャンドルートーキトク協定」と琉球漂着民殺害事件

はじめに

第1節 ローバー号事件後の「ルジャンドルートーキトク協定」

第2節 琉球漂着民殺害と「漢人」住民の救助活動についての考証

第3節 瑯嶠先住民内部矛盾の深刻化

おわりに

第7章 南湾占領問題とルジャンドルの辞職について

第1節 ルジャンドルによる要塞恒久化の働きかけ

第2節 メリシュ商会船舶漂着事件と要塞恒久化放棄提案

第3節 ロンドンキャッスル号の難破と陸路開通案

第4節 軍用道開通と灯台設置問題の難航

おわりに

第8章 「Boutan」から「牡丹社」へ

はじめに

- 第1節 副島ーデロング会談
- 第2節 副島ールジャンドル会談
- 第3節 ルジャンドル覚書における「Boutan」の行方
- 第4節 「土番」と「生蕃」
おわりに

結語

参考文献

2 本論文の概要

本論文は大きく2部に分かれ、第1部では、出兵の行われた恒春半島が西欧にどのように認識されていたのか、またその地域はどのような地域社会を構成していたのかが論じられ、第2部では、ローバー号事件から日本の出兵までの経過を追いながら、当該地域社会がどのようにこれに対応したか、また日本の攻撃がいかにして「牡丹社」に限定されたのかが論じられる。

第1章では欧文の文献に見られる「China」という概念が、明治以後の日本におけるような自明の物ではなく、今日の「中国」とは大きく異なった物として考えられていた事が論じられる。そもそも中国自体が決して単一の物ではなく、相当に異なる地域の複合的な構成体であり、したがってこれに対する認識にも大きな偏差がともなった。欧米では清朝をタタール人征服王朝と見なしたため、清朝成立以後始めて中国王朝の版図に編入された台湾も、タタールチャイナとして一般的な「China」とは異なる物として扱われた。

第2章では、18世紀啓蒙期以降の欧文文献に見られる南台湾の記述を検討する。啓蒙期の南台湾記述は、ドマイヤの議論と有尾人伝承とが結合した、神秘主義的な牧歌的風景をイメージさせるものだった。のちの漂流事件はこうしたイメージに反するものだったが、ここで南とは異なる範疇に属する物として「野蛮」な「東南」のイメージが形成される。

第3章では、恒春半島瑯嶠地区への移民の流れと、地域社会の形成の過程が論じられる。そして当該地域の社会構成が、福佬、客家、原住民族やその混血の混在する複雑なエスニックアイデンティティの坩堝であった事が明らかにされる。そうした空間は清朝知識人による「生蕃」ー「熟蕃」といった概念や、西欧の「混血」概念で認識される事となる。

第4章では、欧文文献に見られる「Boutan」という語は、「牡丹社」のみならず、恒春半島山地原住民族全体を漠然と指す物である事が論じられる。そしてそうした漠然とした名付けを持った事自体が、平地住民にとっての「Boutan」への関係の薄さを表すものと指摘する。

第5章では、ローバー号事件の解決過程をルジャンドルの残した資料に依拠しながら記述するものであり、「ルジャンドルが単身現地に乗り込み、原住民族の頭目と条約を結んだ」とされる従来の記述は不正確で、実際にはルジャンドルが随行した清朝の遠征軍の現地進軍を執拗に拒む現地の住民が協定の根回しを行い、ルジャンドルとトーキトクの合意に至ったものである事が述べられる。

第6章では、「Boutan」が協定の枠組みから距離を取る背景を、「瑯嶠十八社」および低地集落との関係から検討する。「瑯嶠十八社」そのものは虚構であるにもかかわらず、協定がその枠組みにこだわった背景として、ルジャンドルの「瑯嶠十八社」のイメージと、トーキトク側の事情とが検討される。また「身代金」の問題を、こうした協定の枠組みの問題から分析する。

第7章では、ルジャンドルと台湾道劉明燈との合意であった見張り所の設置とその恒久的な要塞化という再発防止策が、曲折を経たのち灯台建設に形を変えていく経過が叙述される。

第8章では、台湾出兵の攻撃対象がなぜ「牡丹社」となったのかを分析する。ルジャンドルにとっての「Boutan」とは、「瑯嶠十八社」の枠組みによりながら、これをトーキトクに代表されるような好ましい部分とし、しかし実際にはそうした関係の通用しない、力で押さえざるを得ない部分を「Boutan」と考えるもので、それは実際には恒春半島の原住民族全体を指すものでもあった。こうした構図は第2章に考察された牧歌的な「南」と野蛮な「東南」という構図を引き継ぐものでもあった。他方日本にとっての「牡丹社」とは、清代知識人の「瑯嶠十八社」と「熟番」「生番」の構図を引き継ぎつつ、恒春半島の原住民族のうちの、まつろわぬ者である「生番」を意味し、「Boutan」の中の一社である「牡丹社」へと特定されていった。こうした過程はまた、ローバー号事件や琉球民漂着事件に見られた、恒春半島の平地住民、原住民族、さらにその両者の間に介在する境界領域的な人々などの複雑な社会構成を、漢人対「生番」、文明になじむ者対なじまぬ野蛮といった二項対立として認識させる過程でもあった。

3 本論文の成果と問題点

本論文の成果はおおよそ以下の3点にある。第1に、これまで台湾出兵に関する研究は、日本あるいは中国の政治史、外交史の枠組みのなかで行われることが多く、また最近では原住民族を主体とする歴史の構築といった視点からも取り上げられてきたが、これに対して本論文が清朝の末端あるいは周辺に位置し、かつ原住民族社会とも近接、接触しながら、その外部にあった地域社会のありかたに注目し、そうした地域社会がどのように形成され、どのような構造を持ち、またローバー号事件から台湾出兵に至る過程のなかでどのような役割を果たしたのかを、具体的に浮かび上がらせる事に成功している点である。これは台湾出兵、ひいては台湾史の研究に新しい視座をひらくものと評価できる。

第2に、これまでローバー号事件から日本の出兵に至る経過はほとんど研究がなされてこなかったが、本論文ではルジャンドルの厦門領事時代の資料（これ自体がほとんど使われてこなかった）を精査する事によって、出兵の前史としてのローバー号事件以降の経過と、その中でルジャンドルの認識とを、具体的に浮かび上がらせるのに成功している点である。これもまた台湾出兵研究に新しい道を開いたものと評価できる。

第3に、本論文の関心はじつは出兵の経緯の叙述そのものというよりは、そうした経緯の中に見られる台湾認識の分析にある。本論文では18世紀以降の欧文（主としてフランス語）の文献に見られる南台湾認識の脈絡を分析し、そうした認識が漢籍に見られる清朝知識人の南台湾認識とどのように関わるのか、またそれらがルジャンドルの台湾認識にどのように影響したかを分析

している。取り上げられた文献は欧文から漢籍まで多岐にわたり、その分析も説得的である。この点もまた台湾認識史の研究に大きく寄与するものと考えられる。

しかしながらこの論文にも問題点がないわけではない。第 1 に、上に上げた地域史、事件の経過とそこでのルジャンドルの認識の叙述、台湾認識史の三者は、それぞれ独自の文脈を持つものであるが、本論文ではこれら 3 者の分析が同時並行で行われているため、叙述の方向が錯綜して、全体の文脈がやや読み取りにくいものとなっている。

第 2 に、作者は平地の地域社会を、閩南系漢人、客家系漢人、原住民族、およびそれらの混血といったエスニックグループの坩堝と表現しているが、それらがどのように組み合わせられて全体としてひとつの地域を構成しているのか、またそうした地域は清朝の権力とどのような関係にあったのか、といった地域社会の具体的構造の像がやや曖昧であるため、地域のありさまを思い浮かべようとする時にいくらか隔靴搔痒の感を免れない。もちろん作者の関心は地域社会の描写そのものよりは、それがどのように認識されたかにあるのだから、これはやや無い物ねだりの評ではあろう。

第 3 に、欧米の台湾認識には作者の取り扱った空想的認識以外に、オランダによるよりリアルな台湾認識もあり、全体像を考えるためにはそこへの顧慮も必要なのではないか。

とはいえこれらの問題は野心的取り組みの必然的産物といえるものでもあり、論文自体に対する高い評価を損なうものではない。

4 結論

以上の審査結果に鑑み、審査員一同は、本論文が独創性に富むすぐれた論文であると認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。

最終試験結果要旨

2010年5月19日

受験者 羽根 次郎
最終試験委員 松永正義 三谷孝 洪郁如

2010年5月14日、本学学位規則第8条第1項に定めるところの最終試験として、学位請求論文提出者羽根次郎氏の博士学位請求論文「ルジャンドルと台湾——1874年日本軍台湾出兵事件への道程」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、羽根次郎氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を羽根次郎氏が有することを認定し、最終試験での合格を判定した。